二者関係, 対人距離および性が非言語的行動に及ぼす影響

——現実の二者関係にもとづいて——

名古屋大学¹ 和 田 実²

Effects of interpersonal relationship, interpersonal distance, and gender on nonverbal behavior in dyads of strangers and acquaintances

Minoru Wada (*Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Nagoya University, Chikusa-ku, Nagoya 464*)

To investigate the effects of actual relationship in dyads (strangers or acquaintances), interpersonal distance, and gender on nonverbal behavior, 32 (16 male and 16 female) undergraduates interact in same sex pair for 7 minutes. The nonverbal behavior investigated was look, eye contact, body orientation, head orientation, body lean, and utterance. The interactions were video-taped. Major findings: 1. Effects of the relationship were found in the frequency of look, duration, frequency, and mean duration of smile, and frequency of body lean (forward). 2. Effects of the interpersonal distance were found in the duration and frequency of smile, frequency of head orientation, duration and frequency of body lean (forward), and duration of eye contact and utterance. 3. Sex differences were found in the frequency of look, duration of smile, duration and frequency of body lean (forward), and duration of eye contact.

Key words: nonverbal behaviors, strangers, acquaintances, interpersonal distance, sex differences.

非言語的コミュニケーションに関する研究は、最近、非常に多い。しかし、非言語的行動の機能や非言語的行動間の関係を説明する理論的試みはほとんどなされていない。しかも、これまでの非言語的行動の研究は、面接場面を設定するなどして、見ず知らずの者同士の非言語的行動を研究しているものがほとんどであり、二者の関係を考慮して非言語的コミュニケーションを研究しているものは、非常に少ない。実験的に二者の関係を操作している研究 (Coutts, Schneider, & Montgomery, 1980; 大坊, 1985; 和田, 1988) を除けば、現実の関係をとり入れて比較検討している研究はほとんど無いと言ってよい。

現実の関係を扱った研究としては、Rubin (1970) と Rutter & Stephenson (1979) をあげることができる。Rubin (1970) は、愛情尺度 (love scale) によって恋人同士の関係を強愛情群と弱愛情群に分けた。そして、2人の相互作用中の視線行動を3分間観察したところ、視線の交錯 (eye contact: 以下 EC と略す) は、弱愛情群より強愛情群の方が多かった。しかし、単なる視線には愛情の強さによる差はみられなかった。

また、Rutter & Stephenson (1979) は、同性の見ず

知らずの者同士と友人同士の視線行動について比較し、視線行動は主として対人態度 (好意) を伝えるものなのか、あるいは単に情報を収集するためのものなのかを調べた。その結果、とりあげた7つの測度のうち、①視線に費やした時間の割合 (%), ② EC に費やした時間の割合 (%), ③視線の平均の長さ (秒), ④聞いている間、視線に費やした時間の割合 (%) の4つにおいて、友人同士よりも見ず知らずの者同士で多くなることを報告している。すなわち、時間に関する測度のみ差がみられたのである。

このように、EC について Rubin (1970) と Rutter & Stephenson (1979) ではまったく逆の結果となっている。すなわち、前者では関係の深い方が EC が多いのに対し、後者では関係の浅い方が EC が多いのである。しかし、このように視線行動をとりあげるだけでは、二者間でかわされる多くの非言語的行動を見逃しているといえる。今後の非言語的行動に関する理論化のためには、二者間でかわされる多くの非言語的行動を同時に考えていく必要がある (マルチチャンネル・アプローチ)。そこで、視線行動に限定せず、少なくともこれまでの非言語的コミュニケーションの研究で扱われている非言語的行動をとりあげ、見ず知らずの者同士 (以下、ST と略す) と知人同士 (以下、AQ と略す) の間に相違が有るのか否かを検討しようというのが本研究の第一の目的である。なお、ここでいう AQ とはまった

¹ 現所属 東京学芸大学。

² 本研究をご指導くださいました名古屋大学教養部の長田雅喜教授および名古屋大学教育学部の久世敏雄教授に感謝いたします。

くの初対面ではないということである。

また、これまでの研究は対人距離がさまざまな非言語的行動に影響を及ぼすことを報告している(和田, 1987a)。その際の解釈としては、一般に二者間でかわされる非言語的行動による親密性の変化で説明されている(親密性に関する均衡理論: Argyle & Dean, 1965)。そこで、二者間の親密性のレベルそのものが異なる ST と AQ において、対人距離(対人距離によって表される親密性)の相違によって同じような影響を受けるのかどうかを調べるのが第二の目的である。

さらに、対人距離による非言語的行動への影響の及ぼし方が男女で異なるという研究(Aiello, 1972; Hansen & Schuldt, 1982)がみられる。そこで、二者間の親密性のレベルそのものが異なる ST と AQ においても、性差が有るのか否かを調べるのが第三の目的である。

方 法

実験デザイン 二者の関係(ST, AQ), 対人距離(近距離, 遠距離), 性の $2 \times 2 \times 2$ である。

被験者 大学1年生 32 名(男女各 16 名)が2人ずつ同性ペアとなって実験に参加した。なお, ST 条件の被験者は別々の心理学の講義を受講している学生で, まったく面識のない者同士である。一方, AQ 条件の被験者は, 同一の心理学の講義を受講している中での友達同士(知り合い)ということ募集した。

対人距離の操作および話題 二者間のイスの中心間距離を 60 cm (近距離) と 260 cm (遠距離) とすることで行った。話題は和田(1986)が用いた中で ST と AQ で話しやすさが異ならない(話す内容に事欠かない)であろう親密さの低い話題から選んだ。それは“大学の講義について”であり, 和田(1986)による 60 人の被験者の話題の話しやすさに関する評定(7段階)での平均値は 4.83 ($SD=1.52$) であった。

手続き 所定の場所で被験者と待ち合わせ, 2 人の被験者が揃ってから実験室に導入した。入室後, 2 人の被験者に机をはさんで向かい合ってすわってもらい, 自己紹介をもらった(AQ の場合は実験者に紹介するため)。その後, “2 人の人が話をする時に, どのように話を進めていくのかをビデオに撮って調べる”という表向きの実験目的を話した。それから, 実験者が話題を提示し, ベルを合図に 7 分間話してもらった。相互作用中, 実験者は隣の実験室に移り, 被験者のいる実験室の天井に対角線に取り付けられたビデオカメラ 2 台を操作しながら, 2 人の上半身が同一画面に入るように相互作用の様子を録画した。

相互作用終了後, 相互作用中の気分などを問う質問項目に回答してもらい, 実際の実験目的を告げ, お礼を述べて終った。全体を通して約 30 分の実験であった。

なお, 非言語的行動の従属測度は実験終了後, 実験中に録画したビデオテープを再生しながら評定した。

従属測度 (1) 非言語的行動: 視線, 微笑, 体の向き (body orientation: 以下 BO と略す), 体の前への傾き (body lean-forward: 以下 BLF と略す), 体の後ろへの傾き (body lean-back: 以下 BLB と略す), 頭の向き (head orientation: 以下 HO と略す) の時間, 回数, 平均時間である。BO とは自分の胸を相手と直面させるのを避けている状態をさし, HO とは自分の顔面を相手と直面させるのを避けている状態をさし, その他の行動は文字通りの意味である。また, 二者の視線の重なりを EC として, その時間をとりあげた。さらに, 広い意味での非言語的行動として発言時間をとった。(2) 実験後の質問紙: “いらいらした”, “不愉快な”, “快い” 等の相互作用中の気分を問う 12 項目 (5 段階評定), 相互作用中の二者間の物理的距離を問う “近すぎる-遠すぎる” の 1 項目 (7 段階評定) 等について問うた。

分析方法 2 人の評定者 (男子の教育学部生と研究者自身) が VTR を見ながら, 評定しようとしている行動が生じた場合に行動記録計のボタンを押すことにより音に変え, それを 0, 1 のデータに変換し, それをもとに各指標の時間, 回数を求めた。

結 果

対人距離操作の有効性の吟味 実験後に被験者に問うた二者間の物理的距離をみると, 近距離よりも遠距離に操作した方が有意に遠いと感じていた (近距離: $M=3.38$, $SD=0.87$; 遠距離: $M=6.06$, $SD=0.76$; $t_{(30)}=9.15$, $p<.001$; 7 段階評定)。

非言語的行動の評定一致率 2 名の評定者が 32 名の中からそれぞれの指標ごとに 4 名の被験者をランダムに選び出して評定した。そして一致率を {(評定の一致した時間)/(相互作用の時間)} で計算した。その結果, 視線 .846, 微笑 .865, HO .858, BLF .998 であった。このように高い値が得られたので, 同一画面に映った被験者を各々の評定者が一方の被験者のみの行動を評定した。なお, BO は 1 名, BLB は 10 名で生じたのみであったので, 以後の分析から省いた。なお, 評定にあたって特別に訓練は行っていないが, もう 1 人の評定者はこれまでも協力してくれている者であり, 評定法には熟知している。

相互作用中の非言語的行動

個々の非言語的行動 各行動の測度の平均値と標準偏差を示したのが Table 1 である。各指標の測度ごとに二者の関係 (2) $\times$ 対人距離 (2) $\times$ 性 (2) の分散分析を行った (いずれも $df=1, 24$)。なお, 時間と平均時間は対数変換を施し, その値を用いて分散分析を行った。

Table 1
Means and standard deviations (in parentheses) of nonverbal behavior in interacting dyads

Gender	Look				Eye contact				Utterance		
	Duration		Frequency		Mean duration		Duration		Male	Female	
	Male	Female	Male	Female	Male	Female	Male	Female			
Stranger :	Close	1 717.24 (395.84)	2 034.50 (498.92)	105.00 (16.40)	69.50 (4.61)	16.33 (2.27)	29.26 (6.80)	691.50 (142.50)	933.50 (106.50)	1 719.00 (289.50)	1 903.00 (661.10)
	Far	2 323.75 (516.27)	2 763.00 (585.09)	80.75 (13.99)	81.50 (29.52)	29.43 (7.54)	39.93 (20.16)	1 309.50 (251.06)	1 861.00 (855.00)	1 868.50 (266.32)	1 860.75 (355.20)
Acquaintance : Close	Close	1 475.50 (695.84)	2 128.00 (654.28)	73.75 (15.16)	89.75 (11.76)	19.79 (9.64)	24.85 (9.36)	503.00 (278.00)	1 159.00 (616.00)	1 904.50 (497.77)	1 831.75 (374.12)
	Far	2 521.50 (741.35)	3 222.75 (384.06)	58.75 (13.81)	62.75 (15.91)	47.82 (21.04)	57.72 (25.83)	1 546.50 (633.50)	2 327.00 (38.00)	1 884.25 (285.54)	2 079.50 (286.30)
Gender	Smile				Head orientation				Mean duration		
	Duration		Frequency		Mean duration		Frequency		Male	Female	
	Male	Female	Male	Female	Male	Female	Male	Female			
Stranger :	Close	704.00 (290.49)	2 062.25 (853.79)	25.00 (4.95)	36.00 (2.55)	27.88 (9.66)	56.26 (21.64)	1 030.50 (574.15)	752.75 (606.23)	29.00 (11.02)	17.63 (8.97)
	Far	1 182.25 (465.34)	1 463.50 (799.80)	42.00 (14.35)	38.00 (9.67)	29.02 (13.25)	38.66 (20.80)	373.50 (208.36)	245.75 (161.77)	15.75 (5.07)	10.72 (4.35)
Acquaintance : Close	Close	1 665.00 (789.27)	1 807.00 (454.53)	30.75 (3.56)	43.75 (7.08)	55.20 (27.28)	41.17 (6.53)	1 593.25 (1 299.96)	661.00 (233.47)	36.00 (3.00)	64.10 (71.68)
	Far	1 037.25 (529.66)	804.50 (518.71)	25.25 (6.22)	20.25 (7.26)	39.11 (15.03)	36.42 (12.20)	631.75 (427.58)	374.50 (285.66)	22.50 (8.73)	24.42 (10.30)
Gender	Body lean (forward)				Mean duration						
	Duration		Frequency		Mean duration		Frequency		Male	Female	
	Male	Female	Male	Female	Male	Female	Male	Female			
Stranger :	Close	200.25 (307.76)	1 640.00 (1 764.31)	6.25 (7.23)	4.50 (20.29)	13.93 (1 084.71)	13.93 (1 799.51)				
	Far	4 052.25 (138.99)	2 100.00 (2 100.00)	3.50 (0.50)	0.50 (0.50)	2 100.00 (2 100.00)	2 100.00 (2 100.00)				
Acquaintance : Close	Close	3 683.25 (839.41)	1 054.50 (1 342.60)	12.50 (17.15)	16.50 (15.17)	2 284.20 (1 928.73)	58.77 (78.73)				
	Far	3 036.00 (1 690.13)	1 050.00 (2 033.32)	4.50 (4.97)	0.25 (0.43)	2 180.91 (2 020.74)	1 050.00 (1 818.65)				

Note. The unit of duration and mean duration is 1/10 s.

視線：時間は対人距離が近い時より遠い方が長く ($F=9.66, p<.001$)、男性より女性の方が長い傾向にある ($F=4.04, p<.10$)。回数は AQ より ST の方が多く ($F=3.70, p<.10$)、対人距離が遠い時より近い方が多い ($F=4.07, p<.10$) 傾向にある。また、二者の関係×性の交互作用に傾向差がみられ ($F=4.15, p<.10$)、男性は AQ より ST の方が回数は多いが、女性では差がみられないことを示している。さらに、二者の関係×対人距離×性の2次の交互作用に傾向差がみられ ($F=3.22, p<.10$)、女性においてのみ ST と AQ が対人距離の遠近で逆の結果になることを示している。平均時間は近距離より遠距離の方が長く ($F=13.82, p<.001$)、男性より女性の方が長い傾向にある ($F=3.63, p<.10$)。

EC：近距離より遠距離の方が長く ($F=26.52, p<.001$)、男性より女性の方が長い ($F=8.77, p<.01$)。

微笑：時間に関しては ST は対人距離による差はみられないが、AQ は遠距離より近距離の方が長い傾向にある ($F=3.58, p<.10$)。回数は男性では近距離より遠距離の方が多いが、女性では逆に遠距離より近距離の方が多い ($F=6.74, p<.05$)。また、ST は近距離より遠距離の方が多いが、AQ は逆に遠距離より近距離の方が多い ($F=14.26, p<.001$)。平均時間は男性では ST より AQ の方が長い、女性では逆に AQ より ST の方が長い傾向にある ($F=3.30, p<.10$)。

HO：時間は遠距離より近距離の方が長い ($F=7.53, p<.05$)。回数は遠距離より近距離の方が多く ($F=6.52, p<.05$)、男性は AQ より ST の方が多いが、女性では逆に ST より AQ の方が多い傾向にある ($F=3.93, p<.10$)。平均時間は遠距離より近距離の方が長く ($F=3.72, p<.10$)、女性では関係による差はみられないが、男性では AQ の方が長くなる傾向にある ($F=4.00, p<.10$)。

BLF：時間は女性より男性の方が長い ($F=5.81, p<.05$)。また、ST は近距離より遠距離の方が長い、AQ では対人距離による差はみられない ($F=4.79, p<.05$)。さらに、男性は近距離より遠距離の方が長い、女性では対人距離による差はみられない傾向にある ($F=3.25, p<.10$)。回数は遠距離より近距離の方が多い ($F=4.45, p<.05$)。平均時間は女性より男性の方が長く ($F=4.74, p<.05$)、また ST では近距離より遠距離の方が長い、AQ では対人距離による差はみられない傾向にある ($F=3.16, p<.10$)。

発言時間：何ら有意な差はみられない。

全体としての非言語的行動 全体としての非言語的行動にどのような相違がみられるかを、マハラノビスの汎距離 D^2 の最小値を最大化にする変数選択基準に基づいたステップワイズ法の判別分析を行って調べた (Table

Table 2
Discriminant coefficients of relationship,
interpersonal distance, and gender
(standardized)

	Coefficient		
	Relation- ship	Distance	Gender
Look (frequency)	-.749	—	-.482
Smile (duration)	-3.178	-.969	.603
Smile (frequency)	1.274	.548	—
Smile (mean duration)	2.897	—	—
HO (frequency)	—	-.560	—
BLF (duration)	—	.735	-.812
BLF (frequency)	.756	-.486	.399
Eye contact	—	.849	.612
Utterance	—	.686	—
Group centroids			
Stranger	-.667		
Acquaintance	.667		
Close distance		-1.467	
Far distance		1.467	
Male			-.705
Female			.705
Classification results (%)			
Stranger	75.0		
Acquaintance	68.8		
Total	71.9		
Close distance		93.8	
Far distance		93.8	
Total		93.8	
Male			81.3
Female			68.8
Total			75.0
Notes. HO : Head Orientation ; BLF : Body Lean (Forward)			

2). 投入した変数は視線、微笑、HO、BLF それぞれの時間、回数、平均時間、EC の時間そして発言時間の14変数である。なお、時間と平均時間に関する測度は対数変換を施してある。

(1) 二者の関係による2群判別 5変数が基準を満たして選択された (Wilks' $\Lambda=0.68, \chi^2_{(5)}=10.67, p<.06$)。標準化判別係数を見ると、微笑の回数と平均時間、BLF の回数が正の係数を、視線の回数と微笑の時間が負の係数を示している。すなわち、微笑の回数と平均時間、BLF の回数が多いのが AQ であり、視線の回数と微笑の時間が多いのが ST である。

(2) 対人距離による2群判別 7変数が基準を満たして選択された (Wilks' $\Lambda=0.30$, $\chi^2_{(7)}=31.59$, $p<.001$). 標準化判別係数を見ると、微笑の回数、BLFの時間、EC、発言時間が正の係数を、微笑の時間、HOの回数、BLFの回数が負の係数を示している。すなわち、微笑の回数、BLFの時間、ECと発言時間が多いのが遠距離であり、微笑の時間、HOの回数、BLFの回数が多いのが近距離である。

(3) 性による2群判別 5変数が基準を満たして選択された (Wilks' $\Lambda=0.65$, $\chi^2_{(5)}=11.71$, $p<.05$). 標準化判別係数を見ると、微笑の時間、BLFの回数、ECが正の係数を、視線の回数とBLFの時間が負の係数を示している。すなわち、微笑の時間、BLFの回数、ECが多いのが女性であり、視線の回数とBLFの時間が多いのが男性である。

討 論

個々の非言語的行動 視線の時間と平均時間は近距離より遠距離の方が、また、男性より女性の方が長く、従来の研究結果 (Argyle & Dean, 1965; Argyle & Ingham, 1972; Coutts & Schneider, 1975) に一致している。性差に関して、Levin & Sutton-Smith (1973) は4-5歳の子供においてもすでに、男の子より女の子の方が視線の時間が長いことを指摘している。この事に関して、Rutter (1984) は①動機づけと②情報という2つの観点から解釈している。具体的には、①は男性より女性の方が生まれつき、あるいはかなり小さい時から親和欲求が高く、それが視線を高める、あるいは視線が何らかの理由で男性より女性の方で脅威的でないということであり、②は話している時より聞いている時の方が多くの情報をとり入れることができ、その聞いている間によく見る人は、より社会的手がかりやフィードバックに依存する人であり、それが女性である、というものである。今後は親和欲求といったパーソナリティ変数を含めて、性差の生じる原因を考えていく必要がある。

一方、視線の回数はAQよりSTの方が、遠距離より近距離の方が多くなっている。しかも、前者は男性にのみ当てはまる。なお、この結果は男性を被験者として実験的に二者間の印象を好意的か非好意的かに操作して調べた和田 (1988) に一致している。ここでの結果も同じく視線の回数を多くすることにより、相手に気づかれないように相手の情報を得ているものと考えられる。というのは、実験後に問うた相互作用中の気分との相関を見ると、“いらいらした” ($r=.366$, $p<.05$)、あるいは“不愉快な” ($r=.435$, $p<.05$) と感じた者ほど視線の回数が多くなっているからである。このように同じ視線といってもそれぞれの測度によって意味が異なることが考えられるので、他の非言語的行動も含めて、それぞ

れの測度の果たす機能を検討する必要がある。

ECは近距離より遠距離の方が長く、男性より女性の方が長い。これはArgyle & Dean (1965) などに一致する。

親密な友達でない単なる知人であっても、まったくの見ず知らずの者と相互作用をするのではないので、視線に何らかの相違があると考えたのであるが、回数を除いて視線にもECにも二者の関係による差異が見られないことが示された。これは、先のRubin (1970) やRutter & Stephenson (1979) とまったく異なっている。この理由として、実験を実施した時期が入学して間もない夏休み前で、しかも同じ心理学の講義を受講している者の中での友達をAQとしたことが考えられる。すなわち、AQがRutter & Stephenson (1979) のように、STと比べてそれほど親密な関係にまで進展していなかったものと思われる。一方、逆に考えるとSTに対する時とAQに対する時で、視線の用い方は変わらないということかもしれない。そこで、さらに7分の相互作用の時間を相互作用の開始後3分と終了前3分に分け、二者の関係(2)×前後半(2)の分散分析を行って調べた。すると、ECにおいて興味ある結果が得られた(視線の時間についても同じ事が言えるが、交互作用が有意ではなかった)。すなわち、開始後3分より終了前3分の方がECは少なくなる ($F_{(1,30)}=8.24$, $p<.001$) が、これはSTには変化はみられないが、AQが少なくなる ($F_{(1,30)}=3.43$, $p<.10$) ためである。これは、AQはすでに何らかの関係ができあがっているの、最初視線を合わすが、徐々にその必要がなくなっていくのではないと思われる。一方、STはまったくの初対面であるので、ECを減らさずに二者間の親密さを増やそうとしたのではないかと考えられる。いずれにせよ、今後は、もっと親密な関係にある者同士について調べる必要がある。

さらに、“視線を避けあうのが日本の礼儀” (井上, 1982, p.108) と言われることから、たとえ(親密な)友達同士であっても、恋人同士でない限り、視線そのものは見ず知らずの者に対するのとはほとんど変わらないことも考えられる。実際に、和田・廣岡・林 (1986) による友人との行動のチェックリストに基づいて、二者間の親密さを測定し、二者間の親密さの低い者同士と高い者同士を比較した和田 (1987b) によると、指標としてとった非言語的行動の中で親密さの違いによる影響がみられたのはECのみで、しかも傾向差にすぎなかった ($F_{(1,19)}=3.63$, $p<.10$) ことを報告している。よって、同じくさらに親密な関係にある恋人同士や非常に親密な友人同士を研究することにより、明らかにする必要がある。

微笑の時間はSTでは対人距離による差はみられな

いが、AQ では遠距離よりも近距離の方が長くなる傾向にある。これは対人距離による非言語的行動の違いを非言語的行動によって示される二者間の親密性で説明しようとする Argyle & Dean (1965) の均衡理論の予測と一致しない。この理論は見ず知らずの者同士のみに適応できると言うことも知れないが、本研究では傾向差にとどまっており、今後さらに研究を要するところである。一方、平均時間は男性では ST より AQ の方が長い、女性は逆に ST の方が AQ より長い傾向にある。これは、女性の相互作用は社会情緒的な面が強く (Rubin, 1970)、相手に良い印象を持ってもらうために、初対面の相手により多く微笑むということだと考えられる。

HO は対人距離の有意な主効果が時間と回数で得られ、何れも遠距離より近距離の方が多くなっている。また、対人距離の主効果の傾向差が平均時間で得られ、遠距離よりも近距離の方が長いことを示している。これは、近距離の方が1回あたりの時間だけでなく、全体の時間と回数も多くし、相手と顔を向け合うのを避けるということである。なお、時間に関しては和田 (1988) に一致している。

BLF の回数は近距離の方が遠距離より多い。これは傾いた角度を測度とした Coutts & Ledden (1977) に一致する。一方、時間と平均時間は二者の関係と対人距離の交互作用に有意差および傾向差がみられる。これらはともに、ST は近距離より遠距離の方が長い、AQ は対人距離による差がみられないという事を示している。言いかえると、前述の微笑の時間と同様に Argyle & Dean (1965) の均衡理論では説明できないということである。

発言時間は何ら差がみられず、対人距離により影響されるという研究 (Greenberg & Firestone, 1977; Hansen & Schuldt, 1982) と異なっている。一方、対人距離による差はみられないとしている和田 (1988) に一致している。

これまで検討してきたように、均衡理論は ST ではほぼ成立するが AQ においては成立しない非言語的行動がいくつかあることが指摘された。これは、見ず知らずの者同士についての研究結果に基づく均衡理論の限界を示すものであろう。したがって、今後は、親密な (見ず知らずでない) 関係にある者同士にも適応できる非言語的行動についての理論化をめざす必要がある。

全体としての非言語的行動 判別分析によると、関係による判別は5つの変数によってなされ、正判別率は71.9%と高かった。判別関数係数の符号をみると、微笑の回数と平均時間が多いのが AQ というのが分かる。一方、微笑の時間が多いのは ST である。これは何を意味しているのであろうか。Schulz & Barefoot (1974)

は、微笑の測度として回数をとって調べたところ、微笑は親密さを示すだけでなく、不安や対人的な不快を示すことがあることを報告している。また、和田 (1988) は、微笑の意味が相手について抱いた印象によって異なるらしいことを報告している。すなわち、好意的な印象を持った時の微笑は親密さ (好意) を示し、非好意的な印象を持った時は不快を示すと言うのである。本研究の結果からすると、それが微笑の測度によっても異なるということを示唆するのかもしれない。今後、どういう状況の時にはどのような意味が伝わるのかを明確にする必要がある。

対人距離による判別は、5つの変数によってなされ、正判別率は93.8%と高かった。判別関数係数の符号を見ると、微笑の回数、BLF の時間、EC と発言時間が多いのが遠距離である。単独では対人距離による差のみられなかった発言時間がこれまでの研究結果 (Greenberg & Firestone, 1977; Hansen & Schuldt, 1982) と一致して、発言時間が長いのが遠距離として判別されるのが分かる。一方、微笑の時間、HO の回数、BLF の回数が多いのが近距離である。EC では判別されるけれども、単なる視線では判別できないというのは、和田 (1988) と一致している。

性による判別は、5つの変数によってなされ、正判別率は75.0%と高かった。判別関数係数の符号を見ると、微笑の時間、BLF の回数と EC が多いのが女性である。一方、視線の回数が多いのが男性である。すなわち、男性は視線の回数を多くして、相手の情報をともかく取り入れようとしているのであろう。Rutter (1984) の言うように、視線は男性にとっては脅威となるために、回数を多くして、相手になるべく気づかれないようにして、時間経過に伴う相手の情報を取り入れていると考えられる。また、前述のように男性においてのみ AQ より ST の方が視線の回数が増えるという結果が得られており、視線が脅威となるということを裏づけているものと考えられる。

要 約

本研究は、二者の関係、対人距離および性が非言語的行動にどのような影響を及ぼすのかを現実の関係を取り入れて調べた。なお現実の関係としては、まったく面識のない見ず知らずの者同士と同一の心理学の講義を受講している知人同士であった。とりあげた非言語的行動は、視線、EC、HO、BO、BLF、BLB、発言時間であった。ただし、BO と BLB はほとんど生じなかったので分析から除いた。被験者は大学生 32 名 (男女それぞれ 16 名) であった。

得られた主な結果は、次の通りである。

1. 見ず知らずの者同士と知人同士の相違は、視線の

回数, 微笑の時間と回数と平均時間, BLF の回数に現れる。

2. 対人距離の相違は, 微笑の時間, 回数, HO の回数, BLF の時間と回数, EC, 発言時間に現れる。

3. 性差は, 視線の回数, 微笑の時間, BLF の時間と回数, EC に現れる。

引用文献

- Aiello, J. R. 1972 A test of equilibrium theory: Visual interaction in relation to orientation, distance and sex of interactants. *Psychonomic Science*, **27**, 335-336.
- Argyle, M., & Dean, J. 1965 Eye contact, distance and affiliation. *Sociometry*, **28**, 289-304.
- Argyle, M., & Ingham, R. 1972 Gaze, mutual gaze, proximity. *Semiotica*, **6**, 32-49.
- Coutts, L. M., & Ledden, M. 1977 Nonverbal compensatory reactions to changes in interpersonal proximity. *Journal of Social Psychology*, **102**, 283-290.
- Coutts, L. M., & Schneider, F. W. 1975 Visual behavior in an unfocused interaction as a function of sex and distance. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 64-77.
- Coutts, L. M., Schneider, F. W., & Montgomery, S. 1980 An investigation of the arousal model of interpersonal intimacy. *Journal of Experimental Social Psychology*, **16**, 545-561.
- 大坊郁夫 1985 発言, 視線行動に及ぼす対人魅力情報の効果 日本グループダイナミックス学会第 33 回大会発表論文集, 15-16.
- Greenberg, C. I., & Firestone, I. J. 1977 Compensatory responses to crowding: effects of personal space intrusion and privacy reduction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 637-644.
- Hansen, J. E., & Schuldt, W. J. 1982 Physical distance, sex, and intimacy in self-disclosure. *Psychological Reports*, **51**, 3-6.
- 井上忠司 1982 まなざしの人間関係 講談社
- Levin, M. H., & Sutton-Smith, B. 1973 Effects of age, sex and task on visual behavior during dyadic interaction. *Developmental Psychology*, **9**, 400-405.
- Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- Rutter, D. R. 1984 *Looking and seeing*. New York: John Wiley & Sons.
- Rutter, D. R., & Stephenson, G. M. 1979 The functions of looking: effects of friendship on gaze. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **18**, 203-205.
- Schulz, R., & Barefoot, J. 1974 Nonverbal responses and affiliative conflict theory. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **13**, 237-243.
- 和田 実 1986 好意, 対人距離および話題が非言語的行動と自己開示に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **26**, 1-12.
- 和田 実 1987a Argyle & Dean の親和葛藤理論に関する再検討 実験社会心理学研究, **26**, 181-191.
- 和田 実 1987b 対人距離の変化が非言語的行動に及ぼす影響 (未公刊)
- 和田 実 1988 二者の好意, 対人距離および話題が非言語的行動に及ぼす影響 心理学研究, **59**, 45-52.
- 和田 実・廣岡秀一・林 文俊 1986 大学生の交友関係の進展に関する研究 (1) 日本社会心理学会第 27 回・日本グループダイナミックス学会第 34 回合同大会発表論文集, 73-74.

——1987. 8. 24. 受稿, 1988. 3. 12. 受理——